
人として、獣として

echo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人として、獣として

【Nコード】

N4998Q

【作者名】

echo

【あらすじ】

とある男の、とある一日。そして、真実へと行き着く。

(前書き)

この作品は三題噺となっています。題目に関してはネタバレになってしまっているので、後書きにて。

深い深い眠りに落ちていた意識が、何かをきっかけとして浮上を始める。もう少し、この静かで暖かな空間にいたい。そんな願いなど生理的現象の前では成就するはずもなく、浮上する意識は間もなく表層に達しようとしていた。



瞼を通して、部屋に差し込む陽光を感じる。眠気はもうない。これでは、あの暖かく安らかな空間に戻る事は叶わないだろう。俺は小さく舌打ちをすると、ベッドから這い出て机の上の煙草に手を伸ばす。箱から一本取り出して火を点けた。妙に、湿気ている。気にせず二、三度肺に煙を送るが、湿気た煙草ほど不味いものなどなく、もう一度舌打ちをしてすぐさま灰皿に押し付けた。そうして、ふと考える。

——俺は、いつから寝ていたのだろう。

記憶の底を探って見るが、答えは見つからなかった。しかし、全身を覆うどうしようもない怠さは、過度の睡眠を取った時のものによく似ている。丸一日、いや、下手をしたら二日ほど寝ていたのかもしれない。いつから寝ていたのか分からないのだから、当然、寝る近辺の記憶も頭の中には残っていない。寝る前に酒を飲み過ぎたのか。今まで酒で記憶をなくした事などなかったが、寝る前のことをすっかりと忘れていたというのなら、それが理由として考えるに一番しっくりくる。

「……考え込んでいても仕方ないか」

そう口に出して、思考を停止した。そうだ、別に寝る前の記憶などどうでもいいではないか。数日寝てしまっていたのだとしても、さしたる問題などない生活なのだから。

ふと、時計を見る。針はまだ午前中の早い時間を指していた。最近では自堕落的な生活を送っていたので、こんな時間にベッドから出たのは久々かもしれない。

「仕方ねえなあ……」

久々に早く起きた日には、久々にあの場所に向かうとしよう。あまり意気揚々といける場所ではなく、どちらかというと気が重くなってしまう場所だが、いずれ行かなくてはならなくなる。いつもは明日で良いや、と先延ばし先延ばしにしてきたのだが、そろそろ腹を括って真剣に取り組まないと不味いだろう。そう決心すると重い腰を上げ、そこらに乱雑に置かれた服の中から適当にズボンとシャツを選んで身に纏う。しかし初春の今は、それだけでは少し肌寒いだろう。俺はクロゼットへと近づき、その扉を開けた。中にはシワのついたスーツやら、染みのついたパーカーなどの上着やらがハンガーに掛けられている。埃臭い空気が鼻腔をついた瞬間に、違和感を覚えた。何か、大事なことを忘れているような、そんな感覚。しかし、今の俺に忘れて困るような大事なことなどあっただろうか。そう思うと、自然と鼻から己を嘲るような息が漏れる。気のせいだ。俺は違和感を振り払うと、そんなに汚れない上着を羽織り、少し迷ってから湿気た煙草とライターをズボンのポケットに押し込んで、家を出た。



それから少しして、俺は目的の場所の前に立っていた。ここまで来ると足取りは更に重くなる。入りたくない、帰りたい、と俺の心は訴えていた。ハローワーク。この文字を見ただけでも、何とも言えない嫌な気持ちに襲われる。しかし、いつまでも職を失ったままではいけないのもまた事実。しっかり乾燥した煙草を吸う為に、そもそも生きていく為に、職を見つけることは必要不可欠なことだ。俺は早速折れそうになっていた意志を何とか立て直し、扉の向こう

へと足を踏み出した。

「そうですねえ。こういった求人があるのですが、如何でしょうかねえ」

俺の対面相談の担当はでっぴりと太ったブタ男だった。ブタ男が脂の滲んだ鼻をひくひくと動かしながら、俺に幾つかの求人資料を出す。出された資料は林業関係と漁業関係。俺が大柄な体格をしているから、それから判断しての選り出したのだろう。

「希望に合いませんかねえ」

そんなことを考えながらじつと資料を見てみると、ブタ男の生ごみのような口臭が鼻をついた。不快だ。

「他にはないんですか」

林業や漁業も他に策が何もなければ仕方ないとは思うが、あまり積極的になりたい仕事ではない。出来れば他の仕事、クレーターの付いた職場で淡々と出来る仕事があればそれに越したことはないというのが本音だ。

「あるにはありますよ。だけどねえ、貴方何か特別な資格とかは持ってます？　今の時代ねえ、何もなしで仕事先が見つかるほど楽なものじゃないですよ。寧ろ人員減らしたいくらいなのに、国の指示で仕方なく形だけの求人出してる所だっただけなんです。正直な話ね、個人の希望も何もないんですよ。仕事しなきゃ飢え死にするだけなんだから、つべこべ言わずにやりゃあ良いんだ。さっきは仕事を見つけたのは楽じゃないって言いましたけど、貴方みたいにまだ若いなら高望みしなけりゃ何かしらの働き口は見つかります。若い奴で職が見つからないなんて言ってる奴は、身の程を弁えない馬鹿ですよ。いえね、貴方のことを言ってるわけじゃないから気を悪くしないでくださいねえ。……ああ、こんなのはどうですか。川で魚を取る仕事だ。遠洋漁業よりかはよっぽどいい。それに、貴方にはうってつけの職業だと思いますけどねえ」

ブタ男の話をそこまで聞いて、俺は席を立った。ただただ、不快

だった。こいつの言っていることは間違っているのではないだろう。だが、こいつの酷い口臭が、ワイシャツの脇にある黄ばんだ汗染みが、纏わりつく様な粘着性のある声が、人を見下すかのような態度が、すべてが気に入らなかった。こいつの紹介で職に就くぐらいなら、飢え死にした方がマシに思える。とにかく、妙に苛々していた。

「こっちがせっかく親身になってやってるっていうのによ。キレる前に現実見ろよ、馬鹿が」

出口に向かって歩いている途中、小さく吐き捨てるようなブタ男の声が微かに俺の耳に届いた。それが、更に俺の苛立ちを高めた。



今日はこのまま家に帰って寝ようと思っていたが、帰路の途中で一軒のパチンコ店を見つけて気が変わった。財布の中を見ると、そこには千円札が五枚ある。別にこの千円札を増やそうと思ったわけじゃない。この苛立ちに身を任せて、全て使い切ってやろうと思ったのだ。数日何も食べられなくなるかもしれないが、そんな事はどうでも良かった。自動ドアに差し掛かる直前に、とある光景が目に入った。店前の脇の方で派手な格好をした如何にも自己顕示欲の強そうなトラ男が地面に蹲る生き物を蹴り、男の隣にいる色白で前歯の大きい口煩そうなウサギ女が楽しそうに笑いながらそれを見ている。この街ではよく見かける光景。苛々を解消するためや、何か即物的な娯楽を求めている奴らが、力も権利も持たない哀れなあの生き物を痛めつけて楽しむ。あれは普段は見つからないように森などに隠れてひっそりと生きているのだが、文字通り腐るほど沢山いるのだから見つけるのは容易だ。苦しそうな呻き声と、それとは対照的な楽しい笑い声が耳に響く。店の中に入る奴らも、店から出てきた奴らも、そんな光景にも全く興味を示さない。俺自身、どうして普段は目にも留めないあんな光景を今日は気にしたのか分からなかった。今のようは無性に苛々する時でも、痛めつけたいという欲

望が湧いたことは別段ないのだが。呻き声は、男と女の楽しそうな笑い声の中で次第に小さなものとなっていき、その笑い声もまた、自動ドアをくぐった後には機械の放つ騒音に掻き消されて聞こえなくなつた。



数時間後、俺はパチンコ店から出た。思惑通り己の財布の中身は空っぽになり、苛々もとりあえずは治まったのだが、財布と同じように俺の心も虚しさに支配されていた。ポケットからくしゃくしゃになった煙草の箱を出し、そこからくしゃくしゃになった煙草を一本取り出して火を点ける。不味い煙は俺の肺を満たしてはくれたが、心は全くと云つていい程に満たされはしなかった。きつと、煙草が湿気ているかどうかは関係ないだろう。数時間前にいた男と女の姿は当然なく、奴らがいたはずの場所には吐瀉物と煙草の吸殻以外には何も残されていない。男と女は今頃新たな遊びに興じているのだろうか、あれは森にでも帰つたのだろうか。何にしても、どうでもいいことだ。

俺は自宅に向けて歩き始める。心に溜まる空虚さは、時間が経つごとに大きくなっていった。何だろう、この心を支配する空虚な気持ち。どうして、こんなにも満たされていないのだろうか。いや、そもそもどうしたら心は満たされるのだろうか。かつて、俺の心は満たされていた。しかし、俺の心はどうして満たされていたのか、その頃一体何をしていたのかが一つとして分からない。今は自分が生きているのかどうか、その実感すらも分からない。いつから俺の心はこんな空虚に満ちていたのだ。あの頃の、今では忘れてしまったあの頃の満足を、もう一度手に入りたい。

そうしてふと気付くと、俺は自宅から少し離れた所に広がっている広大な森の入口に来ていた。どこかで道を間違えてしまったのだ

ろうか。溜息を一つついて来た道を戻ろうとすると、森を少し入った所に何かが見えた。あの生き物だ。何か、違和感を覚える。朝に感じたものと同じものだ。何故だろう。ここは彼らの主たる住み処である森なのだから、彼らがそこにいるのは当然だと言うのに。その生き物の方へとゆっくりと近づいていく。こちらの姿に気付いたそれは、突然の事に驚き動けないようであり、恐怖だけしか宿していない瞳を俺に向ける。当たり前だ。彼らは痛めつけられることしか知らない存在なのだから。

そういえば、体を包む体毛が頭部などの一部を覗いて殆どなく、常に地肌を露出させていて、貧弱で細い手足を持つ、この哀れで弱い生き物の名は何と言うのだったか。ああ、そうだ。この生き物は……。

そこまで思考が至った所で、俺の頭に一筋の電流が流れた。俺の頭の中にあった違和感が、その正体が判明する。俺が忘れていた大事なことを思い出す。どうして、こんな大事な事を俺は忘れてしまっていたのだろうか。

——俺は、熊だ。

おかしい話じゃないか。どうして熊の俺が服を着て、煙草を吸って、職探しをして、パチンコなんかしている。どうして俺が、俺達がここにいて、彼らがそこにいる。

俺は着ていた衣服を全て脱いで、何も身につけていないそいつに全て着せてやった。俺のサイズでは当然大きすぎて酷く不恰好ではあったが、熊が着ているよりはよっぽどしっくり来る。当たり前だ、これは彼らのものなのだから。俺に服を被せられたそいつはきょとんと、虚ろな目で俺を見つめる。

「お前、人間だろ。しっかりしろ。ここはお前の住んでいい世界じゃない。あそこは俺の住む世界じゃない」

俺の言葉を受けて、そいつの瞳に微かに光が戻る。俺は四つん這いのそいつを立たせてやり、半ば無理矢理森から押し出した。そし

て、俺は今まで使っていた言葉を捨てた。それだけで、幾らか体が軽くなったような気がする。俺は二本の足で立って歩くのを止め、両手を地面についた。何とも言えぬ安心感が全身を包む。森の大気を目いっぱい吸い込む。肺を満たしたそれは、俺の心に煙草では到底得られない満足感をもたらした。森の奥に向かって力強く雄叫びを上げる。地面に落ちていた気の実を食べる。傍の木の川を両手の爪を使って傷付け己の縄張りを示す。そういった行為の中で俺は自分の脳が退化し、思考が単純化されていく。けれども、怖くはなかった。これも簡単に、心が満たされていく。そうだ、これでいいのだ。



今日も一頭の熊が、森の中を駆ける。ただ縄張りを広げるために。ただ腹を満たすために。ただ森の空気を感じるために。彼は森に戻った代わりに、一度得た知性というものを失ったのだろう。しかし、後悔はしていないはずだ。もう、彼を支配していた虚しさは、もうない。彼の心はどこまでも、満たされていたのだから。

(後書き)

昔の作品、その4。

お題は「クローゼット」「パチンコ」「実はくまのプーさんでした」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4998q/>

人として、獣として

2011年1月29日23時43分発行